

大木ノ輪遺跡（第6次）発掘調査報告

2021（令和3）年2月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、三重県鈴鹿市林崎町・上箕田町・中箕田町・南長太町に所在する大木ノ輪遺跡の工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。
2. 工事立会は、農地整備事業（経営体育成型）鈴鹿川沿岸 8 期事業に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。
3. 工事立会の体制は、次のとおりである。

立会担当	三重県埋蔵文化財センター	調査研究 1 課	角正芳浩	若井啓英
整理担当	三重県埋蔵文化財センター	調査研究 1 課	角正芳浩	
立会期間	令和元年 9 月 24 日～26 日			
立会面積	大木ノ輪遺跡 43 m ²			
4. 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査研究 1 課が担当し、本書の編集・執筆は角正が行った。
5. 当発掘調査の記録は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1:25,000 地形図「鈴鹿」、三重県共有デジタル地図（平成 29 年測図）等を基にしている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2017 三重県共有デジタル地図（数値地形図 2500（道路線 1000）」を使用している。（承認番号：令和 2 年 4 月 1 日付三総合地第 2 号）
2. 本書で用いた座標は、世界測地系に基づくもので、方位は第 VI 座標系の座標北で示している。
3. 標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
4. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（19 版）』による。
5. 遺物実測図の凡例は、以下の通りである。
 - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（19 版）』による。
 - ・土器の残存率は 12 分割して示している。口縁部が残存していないものについては、底部等の残存率を示している。また、1 / 12 以下のものは、「小片」等と示している。
 - ・計測値は完存もしくは復元の値であり、口径・底径は実測時の接地面で計測している。
6. 遺物写真図版の番号は、遺物実測図の番号と対応している。
7. 遺物写真図版は、縮尺不同である。

目 次

I 前 言	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の方法	
3 文化財保護法に関する諸手続	
II 位置と環境	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 造 構	5
1 基本層序	
2 検出した造構	
IV 出土遺物	8
1 造構出土遺物	
2 包含層出土遺物	
V ま と め	9

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	2
第2図 遺跡位置図	4
第3図 造構実測図	6
第4図 調査区北壁土層断面図	7
第5図 出土遺物実測図	8

表 目 次

第1表 造構一覧表	5
第2表 出土遺物観察表	8

写 真 図 版 目 次

写真1 確認調査	1
写真2 長太の大楠	9
写真図版1 調査区東部	10
調査区中央部	
写真図版2 調査区西部	11
SD 1	
写真図版3 出土遺物	12

I 前 言

1 調査に至る経緯

経営体育成基盤整備事業は、担い手の育成、支援、農地の集積・集約化及び農産物の高付加価値化、生産コストの削減などの農業の競争力向上に必要な農用地の大区画化や、用水路のパイプライン化などの生産基盤を整備するものである。鈴鹿川沿岸8期は、鈴鹿川右岸下流域において、用水施設および農道の整備により、営農の省力化を図り、担い手への農地の集積を図るものである。

この事業地内には、周知の遺跡である大木ノ輪遺跡、天ノ宮遺跡、南長太遺跡が存在しており、工事が平成31年(令和元年)度に各遺跡の範囲内で行われることから、工事に先立って確認調査を実施することとなった。

確認調査は、平成30年7月24日～8月6日に事業予定地のうち大木ノ輪遺跡、天ノ宮遺跡、南長太遺跡にかかる約2,500m²の範囲を対象に68箇所の調査坑を設定して実施した。(第1図)その結果、大木ノ輪遺跡の1箇所において、出土遺物を確認した。

この確認調査の結果を受け、延長約40mについて本調査の必要が生じた。そこで四日市農林事務所との協議により、四日市農林事務所より労務提供を受け、工事立会による記録保存を行うこととなった。

なお、大木ノ輪遺跡と天ノ宮遺跡の市道一ノ宮15号線にかかる範囲については、令和元年10月16・17・

24日に9箇所の調査坑を設定して確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

2 調査の方法

工事立会は、令和元年9月24日から同月26日の3日間で実施した。

調査区は、工事の施工幅にあわせ、幅1m、延長約43mで設定した。調査は夜間の通行に供する必要があるため、調査区を3分し、各日ごとに調査を終了し、埋め戻しを行なった。

アスファルト及び道路基盤層は重機で掘削し、遺構検出および遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は、全体平面図及び土層図を1/20で、作成した。

遺構写真の撮影は、デジタル一眼レフカメラNikonD3300を基本とし、補足的にコンパクトデジタルカメラを使用した。

遺物写真は、デジタル一眼レフカメラNikonD800で撮影した。

3 文化財保護法に関する諸手続き

○文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

平成29年11月21日付四農第3226号

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知

○文化財保護法第100条第2号

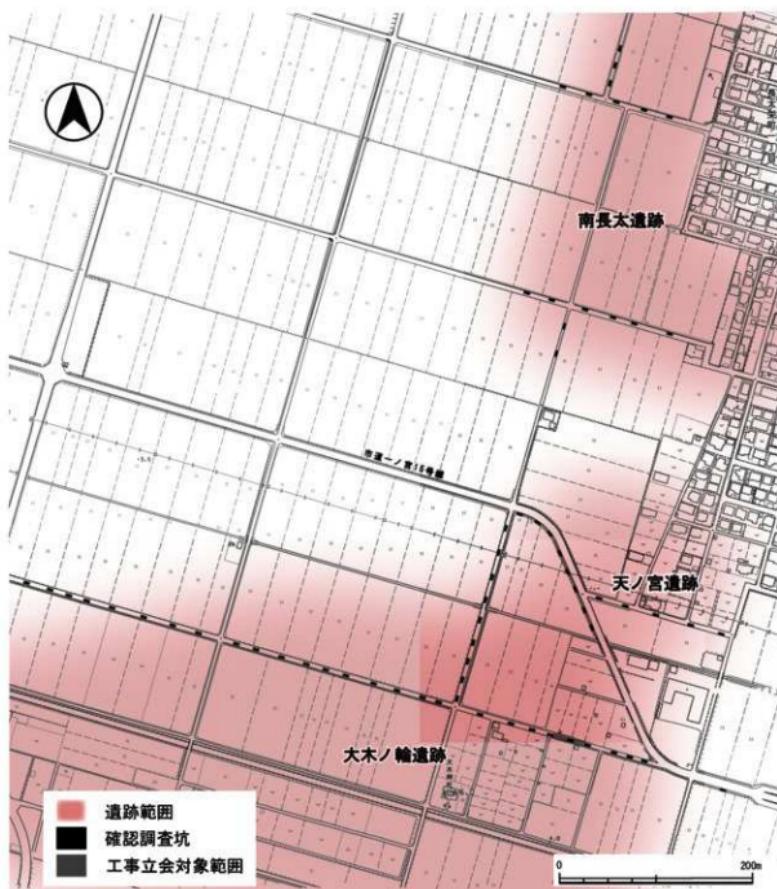
「埋蔵文化財の発見・認定について」

令和元年10月21日教委第12-4409号

鈴鹿警察署長あて三重県教育委員会教育長通知



写真1 確認調査（大木ノ輪遺跡）



第1図 調査区位置図（1：5,000）「三重県共有デジタル地図」を基に作成

II 位置と環境

1 地理的環境

大木ノ輪遺跡(1)は、三重県北部に位置する鈴鹿市の林崎町・上箕田町・南長太町にまたがる東西約1.3km、南北約350mの範囲にひろがる。

三重県亀山市と滋賀県甲賀市の県境に位置する高畠山に源を発し、市域を東流して伊勢湾へ注ぐ鈴鹿川は、下流域において幾度も流路を変えながら肥沃な沖積平野を形成する。大木ノ輪遺跡は、この鈴鹿川が形成した沖積平野に発達した標高3~6mの自然堤防上に立地する。

2 歴史的環境

旧石器時代 鈴鹿川左岸の中段丘面に立地する西ノ岡A遺跡(63)でナイフ形石器やチャート製の縦長剥片が^①、磐城山遺跡(72)で黒曜石製のナイフ形石器などが出土している^②。

縄文時代 起A遺跡(34)で中中期葉の土坑が単独で検出され、深鉢形土器が出土している^③。天ノ宮遺跡(2)からは中中期から後期初頭と考えられる円形刺突文の施された土器片が確認されている^④。上箕田遺跡(9)では第5次調査で遺跡東縁辺部において晩期の遺物包含層が確認され、五貫森式期を中心とする土器が出土している^⑤。

弥生時代 上箕田遺跡が当該時期における北伊勢地域を代表する大規模な拠点集落として形成され^⑥、遠賀川系文化の定着する過程を土地利用と合わせて示す一帯といえる。鈴鹿川左岸の中位段丘面にも重要な遺跡が集中する。県内最古となる菱環紐付式銅鐸が採集された東ノ岡遺跡^⑦(61)の他、中期から後期の集落である中尾山遺跡(70)や多数の方形周溝墓が確認された扇広遺跡(62)等多数の集落が形成された^⑧。特筆すべきは玉作関係遺物が多数の遺跡で確認されていることで、茶山遺跡(60)・東ノ岡遺跡・磐城山遺跡・一反通遺跡(85)では水晶製玉類の関係遺物が確認され、茶山遺跡・一反通遺跡では碧玉製の関係遺物も採集されている^⑨。水晶原石は伊勢湾を望む岸岡丘陵の岸岡山Ⅲ遺跡(26)でも確認されている^⑩。

古墳時代 鈴鹿川左岸の寺田山1号墳(67)は全長85mの前方後円墳で、4世紀終わりから5世紀初頭の首長墓とされる^⑪。海岸部に近い金沢川右岸下流域には、深田古墳群・塚越古墳群・岸岡山古墳群(26)・愛宕古墳群等が所在する。塚越1号墳は画文帶神獸鏡等の鏡や玉類の出土が知られる^⑫。岸岡山には丘陵一体に古墳が分布しており(岸岡山古墳群)、群内最大の22号墳は全長53.5mの前方後円墳で、5世紀末頃の築造とされる^⑬。

集落遺跡としては、沖ノ坂遺跡(71)・起A遺跡・大木ノ輪遺跡・神大寺遺跡(4)・双塚西方遺跡(20)・宮ノ前遺跡(56)・河田宮ノ北遺跡(58)等が知られる。

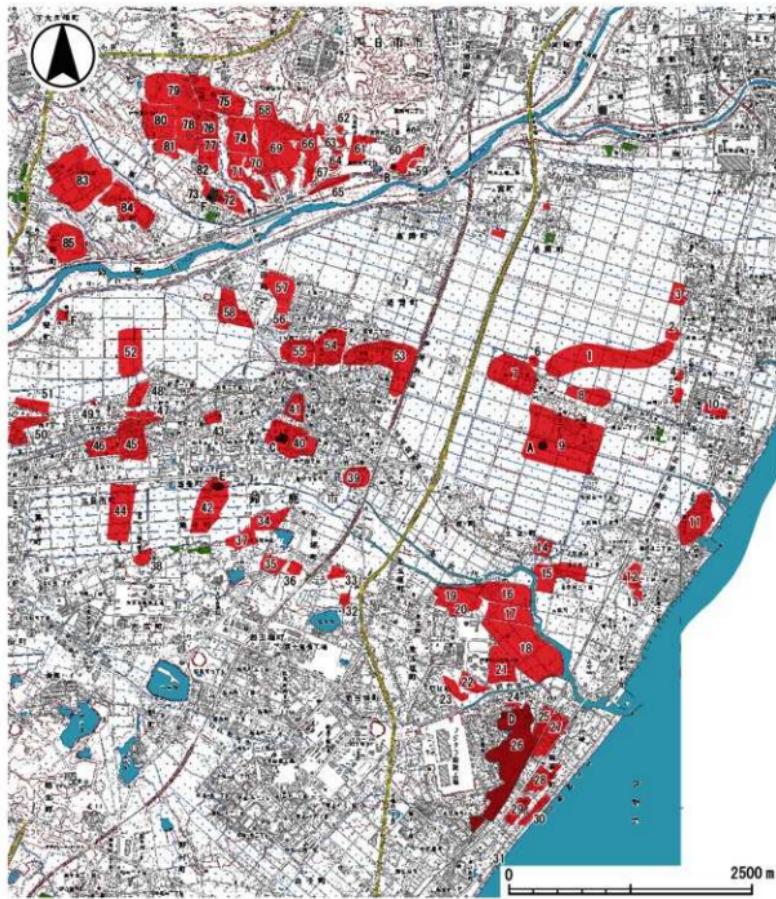
岸岡山東麓に所在する岸岡山古窯跡は6世紀の須恵器窯で、ここで生産された脚付短頭蓋は「伊勢湾型」と呼ばれ、対岸の古墳にも副葬されている^⑭。

古代 古代の当該地域は、伊勢国河曲郡に属する。鈴鹿川左岸の段丘状には、伊勢国分寺(80)や河曲郡衙の正倉院とされる孤塚遺跡(81)が所在する^⑮。

金沢川右岸の天王遺跡(21)では、規格性をもった掘立柱建物が検出され、蹄脚甕が出土していることから、公的な港湾施設等の存在が想定されている^⑯。天王屋敷遺跡(22)では白鳳期に遡る伊勢でも最古級の軒丸瓦が出土している^⑰。

[註]

- ①三重県『三重県史 資料編考古1』2005
- ②鈴鹿市『鈴鹿市考古博物館年報』13, 2011
- ③三重県教育委員会「起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業 地域埋蔵文化財発掘調査報告書』1983
- ④三重県教育委員会「IV 鈴鹿市南長太町 天ノ宮遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業 地域埋蔵文化財発掘調査報告書』1983
- ⑤鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会「上箕田遺跡」1983
- ⑥三重県神戸高等学校強度研究クラブ「上箕田 弥生式遺跡第一次調査報告書」1961・鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会「上箕田 弥生式遺跡第二次調査報告書」1970
- ⑦岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」『考古学雑誌』第75巻4号 日本考古学会 1990
- ⑧註①に同じ。
- ⑨鈴鹿市教育委員会「岸岡山Ⅲ遺跡」1998
- ⑩註①に同じ。
- ⑪鈴鹿市教育委員会『岸岡山史』第一巻 1980
- ⑫註註に同じ。
- ⑬山中草「伊勢国北部における大安寺盆地成立の背景」(三重大学歴史研究会『鈴びと』第54号) 2002
- ⑭鈴鹿市教育委員会『伊勢国分寺・国府跡 3』1996
- ⑮鈴鹿市考古博物館『鈴鹿市考古博物館年報』第10号 2008
- ⑯註註に同じ。



1 大木ノ輪遺跡	15 土師南方遺跡	26 濱永遺跡	42 沢遺跡	56 宮ノ前遺跡	69 塙谷遺跡	83 石室跡東遺跡
2 天ノ宮遺跡	16 中島遺跡	29 南原東1遺跡	43 鶴穴遺跡	57 八重垣神社遺跡	70 中島山遺跡	84 流山遺跡
3 佐久間遺跡	17 佐久間遺跡	30 南原西遺跡	44 三日市遺跡	58 佐久間之池遺跡	71 佐久間山遺跡	85 一ツ道遺跡
4 神大寺遺跡	18 松木川遺跡	31 和曾田遺跡	45 日木暮遺跡	59 黒野神社遺跡	72 畠山遺跡	A 上田城跡
5 吉ノ洋遺跡	19 深田遺跡	32 小塙遺跡	46 鶴野神社遺跡	60 斎山遺跡	73 大坂上遺跡	B 木田城跡
6 大庭神社遺跡	20 又ノ塚西方遺跡	33 北ノ塙遺跡	47 竹野1丁目遺跡	61 高原山古墳群	74 四分堀遺跡	C 神戸城跡
7 林崎遺跡	21 天王遺跡	34 起A遺跡	48 竹野2遺跡	62 鹿広遺跡	75 四分北遺跡	D 岸岡城跡
8 上箕田北遺跡	22 天王星敷遺跡	35 起B遺跡	49 竹野神社遺跡	63 西ノ岡遺跡	76 四分南遺跡	E 沢城跡
9 上箕田遺跡	23 大口野遺跡	36 起C遺跡	50 南田原遺跡	64 西ノ岡遺跡	77 四分西遺跡	F 間部氏城跡
10 下箕田遺跡	24 岸岡山1遺跡	37 起西遺跡	51 南田原遺跡	65 西ノ岡遺跡	78 国分寺遺跡	
11 上箕田城跡	25 岸岡山II遺跡	38 金生水遺跡	52 野辺遺跡	66 今山遺跡	79 国分寺北遺跡	
12 北若松遺跡	26 岸岡山III遺跡	39 畠田遺跡	53 清賀遺跡	67 今山1号墳	80 伊勢国分寺跡	
13 若松遺跡	27 岸岡山古墳群	40 本多寺遺跡	54 貝町遺跡	68 今山山1号墳	81 直瀬遺跡	
14 土師北方遺跡	27 砂秒遺跡	41 龍光寺遺跡	55 十吉古里遺跡	69 富士山桂遺跡	82 南浦遺跡	

第2図 遺跡位置図（1：50,000） 国土地理院「鈴鹿」を基に作成

III 遺構

1 基本層序

調査地の現状は、アスファルト舗装された農道である。層序は、現道のアスファルトとその基盤層である碎石・造成土の直下に、調査区の東側ではにぶい黄褐色シルト層、西側では暗褐色細砂が堆積しており、遺構検出は、このにぶい黄褐色シルト層および暗褐色細砂層の上面で行った。

2 検出した遺構

今回の調査では、溝（もしくは自然流路か）10条とピット8基を検出したが、調査区が幅約1mと狭く、また、出土遺物もほとんどないため、遺構の性格を把握するまでには至っていない。そのため溝とした遺構のなかには、土坑の可能性もあるものも含まれる。

溝は、いずれも調査区に対してほぼ直交する方向で検出された。

S D 1 幅約2.1m、深さ約75cm、底は幅約1.3mでほぼ平坦である。埋土は上層が黒褐色、下層がにぶい黄褐色の粗砂で、最下層に2mm以下の砂礫を含む暗褐色シルトが堆積する。

S D 2 幅約1.5m、深さ約20cmである。埋土は黒褐色細砂で、下層に黄褐色シルトが堆積する。

S D 3 幅約0.3m、深さ約45cm、埋土は褐色細砂である。小規模な溝であるが、山茶碗（第5図1）が出土している。

S D 4 幅約3.4m、検出面からの深さは約70cmである。埋土は、上層から褐色細砂、暗褐色シルト、灰黃褐色粘質土で、山茶碗（第5図2）が出土した。後述するSD6と重複し、それより古い。

S D 5 幅約0.5m、深さ10cm、埋土は暗褐色シルトである。

S D 6 幅約1.6m、深さ約70cmで、埋土は上層より暗オーリーブ褐色シルト、にぶい暗褐色シルト、褐色シルトである。

S D 7 幅約3.0m、深さ約50cmである。土層の観察により、複数回の流出と堆積が繰り返されたことが伺われる。

S D 8 幅約0.9m、深さ約55cmである。

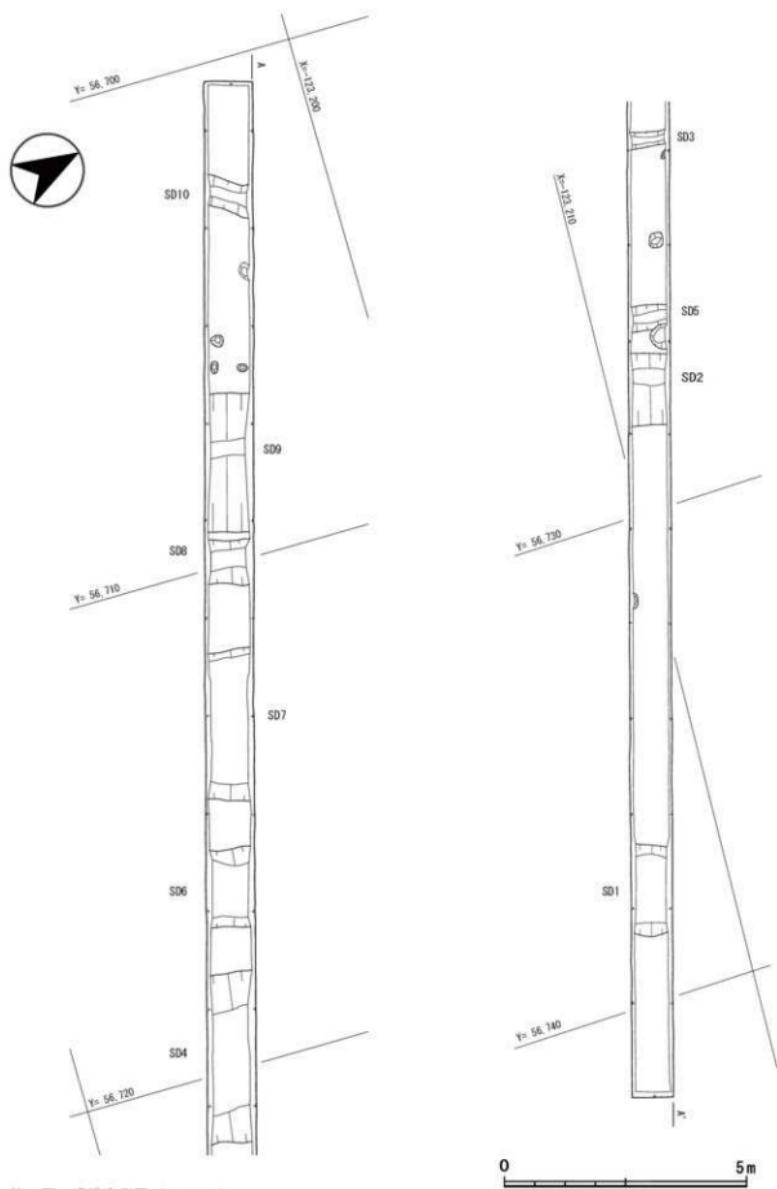
S D 9 幅約4.0m、深さ約80cmである。埋土は上層が暗赤褐色粗砂および褐色細砂で、下層はにぶい黄褐色および褐色極細砂である。

S D 7・8・9 は重複しており、古い順にSD9、SD8、SD7となる。

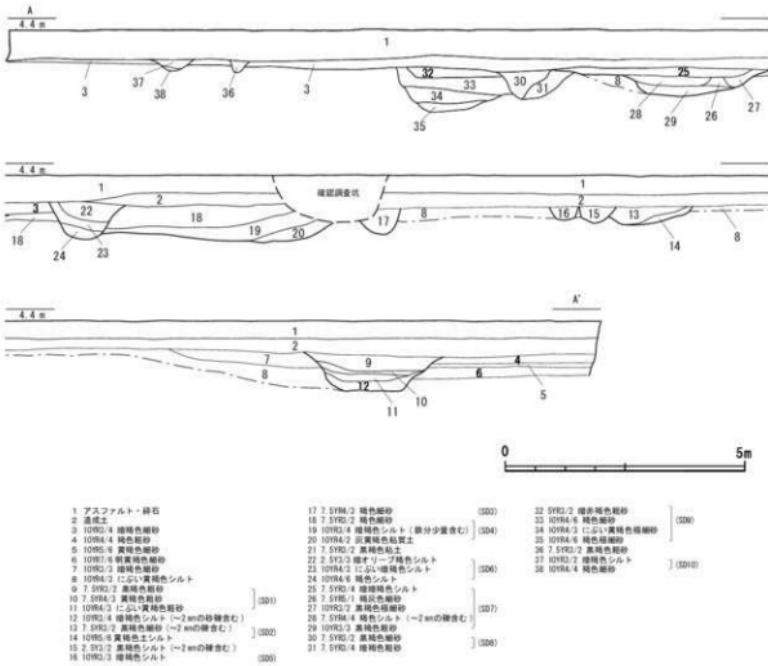
S D 10 幅約0.6m、深さ約15cmの小規模な溝である。埋土は暗褐色シルトで最下部に褐色細砂が堆積する。

遺構番号	性 格	規 模 (幅×深さ)	出土遺物	埋 土	備 考
SD1	溝	2.1m × 0.75m		粗砂～シルト	
SD2	溝	1.5m × 0.2m		細砂～シルト	
SD3	溝	0.3m × 0.45m	山茶碗	細砂	
SD4	溝	3.4m × 0.7m	山茶碗	細砂～シルト～粘質土	SD6より古
SD5	溝	0.5m × 0.1m		シルト	
SD6	溝	1.6m × 0.7m		シルト	SD4より新
SD7	溝	3.0m × 0.5m		細砂～シルト～粗砂	
SD8	溝	0.9m × 0.55m		細砂～粗砂	SD7より古
SD9	溝	4.0m × 0.8m		粗砂～細砂	SD8より古
SD10	溝	0.6m × 0.15m		シルト～細砂	

第1表 遺構一覧表



第3図 造構実測図 (1 : 100)



第4図 調査区北壁土層断面図 (1 : 100)

IV 出土遺物

今回の調査では、遺構および遺物包含層からの出土遺物は少なく、コンテナパット1箱分が出土しただけである。

1 遺構出土の遺物（第5図1・2）

1・2は、それぞれ、SD3・SD4からの出土で、陶器山茶梅の底部である。底部を糸切りで切り離した後、高台を張り付けナデ調整する。1は高台は扁平で、2は高台に稜筋痕が残る。1は藤澤編年の6型式、2は5型式に相当する。

2 包含層出土遺物（第5図3～7）

3は広口壺で、直線的に伸びた頸部から口縁部が大きく広がる。4は壺あるいは甕の底部、5は高杯の脚部片である。櫛描横線文を施し、3方向に透孔

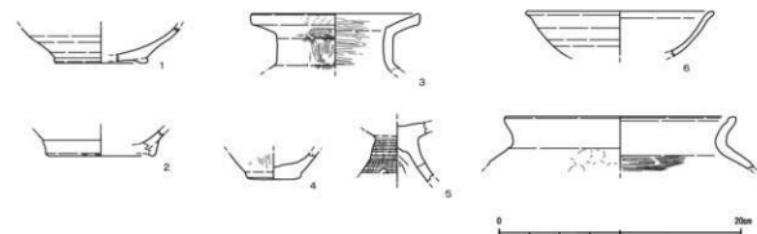
を開ける。いずれも古墳時代初頭の所産と考えられる。

6は陶器山茶梅で、口縁部端部が外反する。藤澤編年の6型式に相当する。

7は土師器壺で、外反する口縁部に上端面をもつ。

【註】

①藤澤良祐「山茶梅研究の現状と課題」『研究紀要』第3号
三重県埋蔵文化財センター 1994



第5図 出土遺物実測図（1：4）

番号 基号	実測 基号	器種	出土 位置	寸法	測量技法の特徴	地主	焼成	色調	保存度	備考
1 001-01	山茶梅	SD3	山茶梅	底径: 8.6 cm 高さ: -	外: ロクナナズ、端付け高付 内: ロクナナズ	黒	真	灰黒	3.5V7/2	2/12
2 001-02	山茶梅	SD4	山茶梅	底径: 7.3 cm 高さ: -	外: ロクナナズ、端付け高付 内: ロクナナズ	黒	真	灰白	3V7/3	4/12
3 001-05	上部器	甕口壺	目 横: 13.3 cm 縦: -	外: ニヨナナズ、ミガキ 内: ニヨナナズ、ミガキ	黒	真	灰黒帶	10V8/4	1/12	
4 001-04	上部器	壺	目 横: 5.5 cm 縦: -	外: ナナズ、ハケ 内: 不明	黒	真	黒	7.5V6/6	10/12	
5 001-07	上部器	高杯	目 横: - 縦: -	外: ナナズ、櫛跡横刷 内: 工具ナナズ	黒	真	にじり黒	7.5V5/1	-	
6 001-03	山茶梅	山茶梅	底 径: 15.0 cm 高さ: -	外: ニヨナナズ 内: ロクナナズ	黒	真	灰白	3.5V7/2	2/12	
7 001-06	上部器	壺	目 横: 18.5 cm 縦: -	外: ニヨナナズ、サクス 内: ニヨナナズ、工具ナナズ	黒	真	灰黒帶	7.5V8/4	2/12	

第2表 出土遺物観察表

V ま と め

古代における行政区画である河曲郡は鈴鹿川下流域に所在し、その右岸には肥沃な沖積平野が広がり、各所に自然堤防が発達している。大木ノ輪遺跡はこれらの自然堤防のひとつに立地する。

今回の調査では溝を10条確認した。このうち時期の確定できるものは、遺物が出土した2条のみで、いずれも鎌倉時代の遺構と考えられるが、調査区に制限があり、その性格を明らかにするまでには至らなかつた。

鈴鹿川によって形成された沖積平野には、昭和50年代に大規模なほ場整備が行われるまで条里地割が残存していた。ほ場整備が実施される以前に撮影された空中写真を見ると、今回の調査区付近は南北方向を長軸とする地割が施行されていたことが確認できる。平成17年度に実施した発掘調査において、中世に始まりその後も同一箇所で営まれ続けた水田畦畔が複数検出しているが、これらは空中写真との照合から、条里地割に基づく畦畔であることが想定された。^①また、『伊勢湾岸地域の古代条里制』に記載された「延宝2年北長太村の推論絵図」からも、自然堤防や自然流路以外にも条里地割に沿って流れ

る溝の存在が確認される。^②こうしたことから判断して、今回の調査で検出された溝は、条里地割に関係した遺構である可能性が高いといえよう。

今回の調査地は、1km以上にわたって伸びる自然堤防上に立地する大木ノ輪遺跡の北東端に位置する。現状では周囲の水田面より一段高く、主に畑地として利用されている。また、樹齢1,000年を超えるとされる三重県指定天然記念物「長太の大楠」^③はこの地に自生する。調査では、遺構検出をシルト・細砂層で行ったが、同じ自然堤防の北側縁辺部にあたる平成17年度の調査では、北から南に向かうに従って、粘土・シルト層からシルトと砂の互層へと変異していく状況が確認されている。^④こうした状況は、自然堤防を形成する堆積状況の一端を示すものと考えられる。

今回の調査区は東西に伸びる自然堤防の東端の北縁部にあたる。同じく自然堤防の東端の南縁部で実施された昭和54年度の発掘調査では、弥生時代前期の遺構・遺物が確認されている。^⑤今回の調査では当該期の遺構・遺物は確認されなかつたが、自然堤防の形成時期や過程を考察する上でデータを得られたのではないだろうか。

【図】

- ①三重県埋蔵文化財センター『大木ノ輪遺跡発掘調査報告書』2008
- ②仲見雄雄「第二章 伊勢国の中里制 第三節 鈴鹿・河曲郡の中里制」(赤木貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979)
- ③註1と同じ。
- ④三重県教育委員会『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1980



写真2 長太の大楠

写真図版 1



調査区東部（南東から）



調査区中央部（南東から）



調査区西部（南東から）



SD1（北西から）

写真図版 3



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おぎのわいせき（だいろくじ）はつくつちょうさほうこく							
書名	大木ノ輪遺跡（第6次）発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	399							
編著者名	角正芳浩							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月	2021(令和3)年2月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大木ノ輪遺跡	鈴鹿市南長太町	207	701	34° 53' 16"	136° 37' 13"	20190924 ~ 20190926	43	農地整備事業（経営体育成型）鈴鹿川沿岸8期
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大木ノ輪遺跡	集落跡	古墳～中世	溝、ピット	土師器、陶器				
要約	鈴鹿川下流域右岸に所在する大木ノ輪遺跡において、中世を中心とした時期の溝等を確認した。							

三重県埋蔵文化財調査報告 399

大木ノ輪遺跡（第6次）発掘調査報告

2021（令和3）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 有限会社ミフジ印刷